悔しさ傾向尺度の開発

○新免愛香

(就実大学)

Key words : chagrin, scale, validity, goal orientations

目的

日常生活において「悔しい」という言葉を耳にすることは少なくない。しかし、後悔や屈辱といった類似感情については研究が行われているが、悔しさを独立した感情として取り上げた研究は極めて少ない。そのため、悔しさの構成概念や機能についてはほとんど明らかにされていない。悔しさはネガティブ感情である一方、向上心に結びつくなど、建設的な行動を動機づける機能を有するものと考えられることから、これを独立した感情として研究する意義はあるものと思われる。以上より、本研究では、悔しさの構成概念について検討したうえで、悔しさ傾向を測定する尺度を開発する。さらに、悔しさの動機づけ機能を明らかにするために、悔しさが自己意識や社会的比較を介して目標志向性に及ぼす影響を検討する。

【研究Ⅰ：悔しさの構成概念に関する探索的研究】

■目的：悔しさの心理学的特徴や、その構成要素を明らかにすることを目的とした。

■方法：10代から60代の200名（男性107名、女性93名、平均年齢=40.33歳、SD=9.24）を対象に以下のインターネット調査を行った。①悔しさを感じる状況②自己に対する反応③他者に対する反応について、自由記述で回答を求めた。

■結果と考察：調査によって得られた599件の記述について心理学を専門とする教員1名と、心理学を専攻する大学生6名がKJ法に基づいて分類した結果、悔しさは「自分の期待や希望に自分が満たない状況」、あるいは「自分の期待や希望通りの事柄を、他者が自分に与えてくれない状況」において生じる感情であり、さらに、その期待や希望と現状との落差が大きいほど悔しさは生じやすいことが示された。また、悔しさは様々な感情や認知が混在する複合的な感情であり、怒り・失望を中核とした複合的な感情体験だと定義できた。

【研究Ⅱ：悔しさ傾向尺度の作成】

■目的：悔しさ傾向尺度の作成を目的とした。研究Ⅰの結果から尺度項目を構成し、尺度の因子構造を検討したうえで、その信頼性および妥当性を検討した。また、悔しさの機能について検討するために、上記の仮説を検証した。

■方法：10代から60代の200名（男性106名、女性94名、平均年齢=40.29歳、SD=9.81）を対象にインターネット調査を行った。①悔しさ傾向尺度、②自己意識・自己内省尺度（辻,

2004）、③社会的比較尺度（大久保・下田・鈴木, 2015）、④日本語版目標志向性尺度（柳澤, 2007）のそれぞれに回答を求めた。加えて、①の各項目について、悔しさの中核的成分だと仮定された怒りと失望の程度を尋ねた。

■結果と考察：因子分析（最尤法、プロマックス回転）の結果、「失敗に対する悔しさ」、「敗北に対する悔しさ」、「侮辱に対する悔しさ」、「裏切に対する悔しさ」からなる28項目4因子構造が採用された。因子間相関は $r=.411$ から.626の範囲であった。本尺度は十分な内的整合性を示し、怒りや失望と事前の予測に沿った相関関係を示すなど、信頼性と妥当性を支持する結果が得られた。さらに、重回帰分析の繰り返しによるパス解析を行った結果、失敗・屈辱に対する悔しさは、公的自己意識を介してパフォーマンス志向性を高め、同時に自己内省を介して学習志向性を高めることが示された。そして敗北に対する悔しさは直接的に学習志向性を高めることが示された。これらの結果は、悔しさの持つ動機づけ機能について、その一端を明らかにしたものと言えるだろう。

表1 悔しさ傾向尺度の各下位尺度と他の尺度との相関関係

	失敗	敗北	侮辱	裏切
怒り	.647 **	.519 **	.842 **	.814 **
失望	.665 **	.749 **	.785 **	.732 **
学習志向性	.125 +	.255 **	.091	.148 *
パフォーマンス志向性	.372 **	.248 **	.293 **	.256 **
公的自己意識	.332 **	.202 **	.367 **	.181 *
私的自己意識	.102	.119 +	.126 +	.045
自己内省	.017	.112	.196 **	.090
社会的比較	.218 **	.071	.287 **	.063

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

図1 悔しさが目標志向性に与える影響

(Manaka SHIMMEN)